

安 元 稔

『イギリスにおける工業化，都市化
および人口の変化』

Minoru Yasumoto, *Industrialisation, Urbanisation and Demographic Change in England*. The University of Nagoya Press, 1994, xii+247pp.

世界でいち早く工業社会の誕生をみたイングランドの歴史人口学研究は、工業化の進展と人口動態との関係を理解するうえでたいへん重要な位置をしめている。

そのイングランド人口史の研究は1981年にリグリーとスコフィールドの大著『イングランド人口史，1541-1871年』¹⁾が上梓されたことで、新たな段階に入った。それ以降の研究はこの二人が確定した全国レベルの人口動態のデータを起点にして、ある特定の地域を取り上げ、人口動態を主軸にしてさまざまな角度から工業化のさなかにある地域社会の変貌ぶりを描く方向に進んできた。本著もそのような研究の流れに属する²⁾。

まず、安元氏が「近世・近代イングランドを対象とした歴史人口学的研究の集大成」と評価する『イングランド人口史』の研究成果を簡単にまとめておこう³⁾。

第一に、「前工業化時代のイングランド人口史研究にとって最も重要な史料である教区冊子の集計値」を分析し、16-19世紀のイングランドの人口数を確定したこと。

第二に、18世紀後半以降の人口爆発の主動因をめぐって、それを死亡率の低下にみるべきか、それとも出生率＝結婚率の増大にみるべきかという論争がずっと以前からあったが、それについて後者に軍配を上げたこと。

第三に、出生率＝結婚率は「結婚＝新しい家族形成は独立した住居と経済的自立を前提とし、従って結婚は経済変数の動きに敏感に反応する」、いわゆる「西北ヨーロッパ」型婚姻形態⁴⁾を媒体にして、あるタイムラグをおいて同時代の経済変動＝実質賃金の変化にたいし反応していること。この最後の点についてはかなり批判が強いように思われる。

さて、本書はリグリーとスコフィールドが切り開いた新しい研究の地平のなかで、西ヨークシャーの中心都市リーズ(Leeds)とその周辺地域の人口動態に焦点をしばり、膨大な統計史料を駆使して多面的に分析したものである。リグリーとスコフィールドの研究成果を産みだした「ケンブリッジ・グループ」直伝の手法がとられている。全体はつぎの四つの章からなる。

- (1) 「あるヨークシャーの教区における農業の展開と人口の変化」⁵⁾
- (2) 「産業革命期のリーズにおける都市化と人口の変化」⁶⁾
- (3) 「19世紀初期のリーズにおける都市型疾病」
- (4) 「ヴィクトリア朝初期のリーズにおける労働者階級住宅の経済および人口動態上の意味」

それぞれが平均50ページ前後。かなり長い。しかも、その相当部分が統計学的な問題の処理にあてられている。それでも論点がよく整理されており、話の筋がたどりやすい。研究の水準は、評者がこれまで参照したことのある本場での一連の歴史人口学の研究にくらべてなんら遜色がないという印象である。以下、簡単に内容をまとめてみる。

第一章ではリーズの近郊農村メスリ(Methley)について、「家族復元法」を中心にした分析がおこなわれる。西ヨークシャーの急速な経済発展はこの農村にも大きな影響をおよぼした。1790年から大規模な石炭採掘がおこなわれるようになった。工業都市向けの近郊農業が発展し、エンクロージャーが進行した。

そのなかで結婚年齢の低下がみられたのである。17世紀前半のメスリにおける初婚の平均年齢は男は29.9歳、女は25.7歳だった。それが19世紀前半には24.6歳と22.5歳にまで低下していた。とくに注目されるのは、石炭労働者や農村労働者などのグループの初婚年齢が土地所有者のそれよりもはるかに若かったことである。経済発展にともなう雇用機会の増大と「プロレタリア化」が結婚年齢を押し下げ、結果として出生率の増加がみられたのであった。

第二章ではリーズの「市街地」(in-town)と、「工業村」および「農業村」からなる周辺の「市外地」(out-

townships)との人口および経済のダイナミックな関係が詳細に分析される。

この章でもっとも注目される点は、「機械化された工業の発展」=「工業化」が開始される以前からリーズ「市街地」が近隣の農村教区および「市外地」から大量の余剰人口を吸収していたという事実である。安元氏によれば、「その意味では都市人口の成長は産業の拡大の結果というよりも、原因とみたほうがよい。」(103ページ)人口の動きそのものに経済変革の起点をみようと考える考え方であり、今後もっと検討されるべき重要課題である。

第三章ではリーズの「総合病院」(General Infirmary)の入退院記録をもとにして、一般民衆の日常的な慢性疾患およびケガの実態が明らかにされる。とくに都市部については患者と工場労働者の年齢構成の類似性が統計的に確認されたうえで、入退院記録の医学的な分析から当時の劣悪な労働条件が浮き彫りにされてゆく。たとえば都市・工業地区では肺疾患の患者が農村部に比べて優勢であることが確認され、そのうえで亜麻工場の労働条件がその主因であると説かれる。リーズ労働者の職業病については、この分野の先駆的な業績として知られる同市の医師サックラの分析があるが⁷⁾、その内容の妥当性がここでは統計的に証明されたことになる。

医学史についても重要な結論がえられる。安元氏は退院・通院停止の理由にかんする統計数字から「回復率」がおよそ六割にも達したことを明らかにして、工業都市の「労働貧民」にたいして病院の「治療価値」が「高かったことは確かである」と結論づける(151ページ)。この結論は近年の歴史のなかの病院を「再評価」する研究動向を補強するものとして注目に値しよう⁸⁾。

この章は医学史と労働史の両方に跨がっているが、両方の領域にたいして行き届いた目配りがなされており、本書のなかでおそらくもっとも独創的な章となっている。

第四章では産業革命期の生活水準論争を念頭におきつつ、工業化の過程におかれた労働者世帯の家計について、センサス(国勢調査)の「集計調査票」(enumerators' books)をはじめ、さまざまな統計資料からの多面的な分析が試みられている。

とくに重要なのは農村労働者世帯との対比であって、都市部の賃金は農村部の1.6倍だったこと、子供、若い女性、未熟練労働者についても就業機会に恵まれていたことなどから、「生活水準が農村部よ

りも悪くなかったことは確かである」(186ページ)との結論がえられる。またリーズ市民全体について家族構成の階級別の相違も詳しく分析されており、リグリーとスコフィールドが描くマクロ次元の鳥瞰図のミクロ次元での具体的な動きがしっかり掴める。

以上、本の内容を簡単にまとめてみた。人口動態に直接かかわる資料はもとより、それ以外にもじつに多様な統計資料が駆使されている⁹⁾。しかも、それがこの種の研究にありがちな自己満足的で読者には無意味な羅列におわらずに、社会史の生の材料としてよく活かされている。数字に弱いものでも抵抗感なしについていける。それだけ問題がよく消化されているのだと思う。

社会の大多数をしめる匿名集団の生活を対象とする社会史の研究では、まずその人口動態を理解しておくことが不可欠である。その意味で本書は今後、社会史研究者の必携の書として位置づけられるはずである。

注

1) E. A. Wrigley and R. S. Scofield, *The Population History of England 1541-1871*, 1981.

2) 本書とあわせ読むべきものとして、安元稔『イギリスの人口と経済発展——歴史人口学的接近』、ミネルヴァ書房、1982年。

3) 安元稔「リグリー、スコフィールド『イングランドの人口史、1541-1871年、一つの復元』に寄せて」、『経済研究』(一橋大学)、34, 4, 1983年。および、拙稿「栄養・伝染病・近代化」、『社会経済史学』、53, 4, 1987年。

4) 安元、「リグリー、スコフィールド……」362ページ。

5) 安元、『イギリスの人口……』第III部第1章「産業革命期における労働力供給」を参照。

6) 同じく第III部第3章「産業革命期におけるリーズの都市化と人口」を参照。

7) C. H. Thackrah, *The Effects of Arts, Trades, and Professions, and of Civic States and Habits of Living, on Health and Longevity*, 1832.

8) 拙稿「医療と近代における人口動態」、社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』、有斐閣、1992年。ただし病院がにせ医者から患者を救ったという評価については私は同調しかねる。拙著『コレラの世界史』、晶文社、1994年、第4章参照。

9) たとえば、識字率の資料。それによると、農村部のほうが識字率は高いという結果になるという。(73~76ページ)

[見市雅俊]